第五百廿六號目次

◎社説

侠氣論

紅顔認め易し

家なき我……善[illegible]の子

◎女學

社會主義の結婚及家庭觀(上)……赤司曙花

當世風の嫁御探(上)……田舎嫁

婦人は劇の保護者ならずや……香柴子

壯士芝居撲滅論

料理道……生間正起

◎雜録

旅窓漫筆……山月子

(玉を抱いて罪あり。默想。悟り濟ませる婦人。虚心なること難し。人氣の昇降。天何をか言ふや。道器に非ず。神の見たる我。新年所感)

日記の一節……柳子

葉枯れぬ

行行分拆表……謙亭

英領印度帝國(下)……横井時雄

會監の四ヶ月(前篇)……有美

◎新文

丘博士の「進化論講話」を讀む……副島生

◎時事

回向院の角力◎小黨分裂◎福地源一郎の今昔

◎隨感

動物學○社會學○人間學○一戰ある所以○氣に兒戯○只だ人にあり○不可不學○人生の慘○露國の暗黒面○日本人○家康○秀吉○日本人の趣味理想○名刀

新刊

弘法大師傳

小野藤太著

並製金四拾五錢 郵税金八錢
上製金六拾錢 郵税金十錢

我に「教界偉人叢書」の第一編として「弘法大師傳」を出だす。古來法教の眞面目を發揮せるは主として偉大なる人物に待てり。弘法大師の如き實に此の要求によりて出でたるものにして、苟も大師を知らずんば、日本の佛教を知れりといふべからず。宗教研究會の主員たる小野藤太先生、即ち多年の研究と其蘊蓄するところを盡くし、流麗多趣味の筆を以て、此書を編著せらる。庶幾くはよりて以て教界に於けるこの大偉人の眞面目を知るに便ならんか。

發行所 東京本郷四丁目 文明堂

月刊雜誌

新公論

毎月一回十日發行

本誌は先に「中央公論」の編輯に預りし同人一同により新に發刊せられ、政治、實業、教育、文藝等各種の方面に亘りて、當代最も健全にして最も清新なる思潮を代表するを以て任ず、毎號内外の大家及新進文士の精力を傾倒せる文字有り、如何に趣味多く、如何に有益なるかは一讀の上其眞否を知るべく、櫻井鷗村主筆たり、青柳有美文藝評論欄を擔當す。

●一ヶ月郵税共拾參錢●半ケ年分七拾六錢●

發行所 東京本郷四丁目五番地 新公論社

補教 佐竹智應師編纂

增補

明如上人御傳繪鈔

本派本願寺圖畫入り 實價金拾八錢郵税金四錢

明如上人の御高德、御維新の御艱難より、借財御償、大教校御創建、護持會御設置、教學御再興の御功績を詳述して、頌德紀念の一端にも供せんと出版せる者なれば、親しく御在世中御教化を蒙むられたる人は購讀ありて御在世の昔を追懷し御遺志を遵奉せられんことを乞ふ。

發行所 京都油小路花屋町上ル 顯道書院

期日	前金		廣告料		送金
毎月二回(十日、二十五日發行)	壹冊定價	拾錢	一行(十七字詰)一回	前金拾錢	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし○郵便切手にて送らるる人は總べて一割增にて計算せられたし
	半年分前金	壹圓拾錢	一段 同	三圓半	
	一年分同	貳圓拾錢	一頁(三段) 同	九圓	
	代金は總して前金にて御注文ありたし、年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事○是れ誠に不本意ながら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知被下度候				

大賣捌 東京 東京堂 西京 勉強堂 大阪 文淵堂

明治三十七年二月十五日印刷
明治三十七年二月十五日發行

發行兼編輯人 青柳猛

印刷人 布川孫市

發行所 東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地 女學雜誌社 (特電話番町千一番)

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍 (新橋電話十八番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第五百貳拾六號

明治三十七年二月十五日發兌

社説

俠氣論

俠に待つところは情にあり。俠の期するところは、麵麭を求むる者に石を與へざるにあり、魚を求むるものに蛇を與へざるにあり。今や、義人あり聖者あり賢者あり。たゞ情あるもの少し。時寒ふして松栢を思ひ、家貧にして良妻を思ふ。かく情あるもの少き時に當りて、實に俠を思ひ、俠者を想ふ。俠や、何れの日にか再び紫雲に乘りて此土に下る。あゝ俠去れり、俠去れり。俠や今足の塵を拂つて地を去れり。その行くところは何處。天際茫々杳として知るべからず。テニソン「エノック・アーデン」の詩を終らんとし、憮然として嘆じて曰く『So part the heroic soul away 此くの如くにして俠骨あるもの遂に行けり』と。あゝ、行けるか行けるか。俠夫兒の魂は遂に地より行けるか。其秀を富士の峯に競へる幡隨院長兵衛を出し、俠を以て其芳を天下に誇る我が國土、また遂に俠氣の影を見るべからず。あゝ、弱き者の聲を聞かずや、貧き者の聲を聞かずや、罪ある者の聲を聞かずや。昔者卑き女人達、價高き香料を携へて聖者の墓に至り平伏し其屍を拜せんとすれば、たゞ白衣の遺されたるのみに驚く。今の弱きもの、助を得んとして呼ども、あゝ答ふるものなし。貧きもの憐みを求めんとして泣けども、あゝ又答ふるものなし。罪あるもの慰めを受けんとして悶けども、又遂に應ふるもの無し。その悼み果して如何ぞや。俠や俠や。俠なくんば嗚呼この弱者と貧者と罪あるものとを如何せむ。弱者は天を恨んで亡び、貧者は富者を羨んで死し、罪ある者は天に呪はれて滅寂せざるべからざる乎。

強き者を崇め富める者を祝し淺しきものを稱す。税吏も然かせざらんや。これなほ仁者の爲に生命を棄るが如く、其間な

に等の奇なく何等の美あることなし。不仁者の爲に身を殺すもの、たゞ至愛の人に於て之を觀る。俠氣は最も大なる愛なり、最も至れる愛なり。即ち一たび發すれば、弱者貧者罪あるもの丶爲に其力を注ぎ、遂にこれが爲に其命を賭するを惜まず。もし天下を擧げて强者と共に弱者を虐げ、富者と共に貧者を嘲り、義人と共に罪ある者を責めなば、弱者と貧者と罪ある者とは、それ何れに適歸すべき。たゞ天地俠氣あり。時に人の心に宿るを以て、弱者も貧者も罪あるものも、その涙をぬぐはれ、僅に安んずるを得、慰むるを得るなり。俠氣に貴ぶところは、實に其の不自然なるほとりにあるを知らずや。

それ世に不自然なるほど價高きは無し。水は至るところとしてあらざる無く、風は己がまゝに吹き其の何れより來り何れに行くを知らず。これ物の最も自然ならずや。されど價あることなし。總て德の價はその不自然なるところにあり。俠の價や又然かなり。俠の美や又然かなり。これ又凡夫の俠を力めて難しとする所以なり。人よ、不自然のたゞ價あり美あるのみにして、實地の用なきを觀て徒に笑ふをやめよ。地の自然はその坦々砥の如からんとするにあり。されど、巍々として千秋に聳ゆる芙蓉峰は、これ宇内の偉觀ならずや。誰か俠の不自然なるを說いて其の美に讃むべからずといふものぞ。俠の氣にして若し粹然として鍾らば、是れ實に其國土の偉觀ならずや。

俠や既に不自然なり。故に、理を斥け理に叛く。俠やたゞ情なり、たゞ氣なり、たゞ愛なり。窮鳥の一たび飛んで懷に入るものあれば、その何故に窮せるやを問はずして、直ちにこれを隱くし溫むるもの、これ俠の氣なり。人もし我れの仁情に信じて麵麭をもとむれば、求むるもの之を得て其食官を傷くるに至るや否やを究めず、まづ其の聲に應じて麵麭を與ふ、これに石を與へざるもの、是れ俠の氣なり。俠中一點の理なく情は其骨髓なり　是に於てか、聖使徒保羅以爲らく、われ若し我が兄弟の爲めならんには基督より離るゝも、又わが願なりと。借問す、保羅は不義を好み地獄を愛するものなりしか。俠の奥秘實にこゝにあり。弱者貧者罪ある者の爲に不義に加擔して神を離るゝにあり、天罰を怖れざるにあり。地獄の刑罰を想ふて之に戰慄する卑怯、なほ自ら稱して大丈

夫なりといふを得べきか。使徒保羅や實に俠夫兒の魁なり。典型なり。今の君子、友と共に道を行くも幾千ならずして告て曰く、卿もし地獄に行くの意あらば、乞ふ進んで獨り先づ行け、我は別れて之より天國の門に入るべしと。蛇蝮の類よ、何ぞ友と共に地獄に遊び、相擁して焦熱火中に燒かるゝ樂みを思はざる。是れ俠氣なきなり、これ愛なきなり、これ稅吏の祈れるを見て傲然高く誇しパリサイの學者根性なり。

俠や又常に眞面目なるものに加擔す。その必ずしも善なるを要せず、又惡なるを辭せず、眞面目に畫策してこれに其心力を傾注し其畫策を以て其生命とし、斃れてのちやむの慨ありて、よく我が情に信ずるものには、直に走りて之に助力す、是れ俠なり。

俠や涙に泣く。涙よく其の鐵腸を溶かすべし。たとひ滔天の激浪に辭せざるとも、一滴の涙には逆らふまじ。たとひ千重の鐵鎖には縛されずとも、もろき涙には繋るべし。涙の湖には溺るゝを辭せず、涙の露にはぬるゝを厭はず。鐵面、尙ほ婦女子の態を爲て恥ぢざる所以のもの、たゞ自から俠の情けを如何んとも爲すと能はざるが故なり。

人或ひは曰く、俠や能く義に勇さむが如くして而も義を無みするとあり、たゞ弱を助けんとするの自負心に急にして正義を後にするが故なりと。嗚呼、此の難者の如き、亦た一種の道學者歟。夫れ、正義とは何ものぞ。正義は、其單一を以て完全するものにあらず、たゞ大道達德の一部分にあらずや。天法に「スヂ」あり義と云ふ。義に種々あり、其の尤とも直にして尤とも可なるものを正義と稱すと雖ども、只是れ大道の一路に過ず。安くんぞ用いて以て無上閫諦を作するを得ん。義と愛と相激する時、玆に俠あり、玆に慈悲あり、玆に贖ひあり、玆に獻性あり。翻えつて彼の義なるものを念ふに、何んぞ小にして何んぞ局促たる。況んや、かの洋學黃口の徒の正義論なるもの、安くんぞ採つて以て涙滴たり血滴たる俠を非議するの價値あらんや。

俠は、一代の名聞を蹂躙す。俠は、一世の富貴權達を廢如す。俠は、大小廣狹を平等にす。俠は、上下强弱を同視す。其前には、黃金も木の葉の如くなり、又一錢も萬鎰の價値を生ず。乙女も勇士の如く、勇士も枯骨の如し。帝王は、其冠を高くすれども位なく、奴婢は、其足に泥すれども卑とし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

侠は、俗界の權衡を打破して、眞位に引直し、屈を伸べて、豪を壓へ、以て一代不平の風塵を快掃す。法律の力なき所、道義の執着する所、贖ふの代料なき所、頼るに便りなき所、則はち侠あり。侠出でて、枯骨生き、死者復活す。之なくんば、世は速やかに陷落すべし。

夫れ、神洲の民、侠を以て粹とす。開國以降の美なる史傳は即はち侠の紀錄にあらずや。時あつてか、外來物質の感化あり、數學と器械とを以て、侠の無計算、無規律を笑ひ、暫らく以て其唯物を長ぜんとす。凡そ神洲の外來文明の新たに輸入せらる丶當座に於て、先づ多く滅却し去るものは、則はち侠の氣なり。

然りと雖ども、國粹豈に一朝にして亡びんや。天稟固より輕々しく沒すべからず。暫らくして猛然として挽回し、更に回天の勢を以て押寄せ來るは、外來皮相の文明に激したる反動の聲なり。見よ、今ま如何に侠に餓えて侠に叫ぶの要求、全天下に勃興しつ丶あるかを。

四　紅顔褪め易し

天下の人われを見て拍手し、わが言を聴ひて喝采す。生々の氣わが胸宇に勃然たるものあればなり。四方の佳人われを見て悦び、われに媚をおくる。紅顔の美しきものあればなり。生々の饗頭その勢を極むる間、天下は是れ我がものなり。紅顔其色鮮かなる間は、これ佳人の我れに懐く時なり。されど日は行き月は進み、年移る。昔日の生氣漸く衰へ、紅顔また褪めなんとす。生氣衰へ紅顔褪めたるの日、天下の衆人なほ我れに拍手喝采し、四方の佳人なほ我に媚をおくるべきか。然らず。天下反き佳人離る。

然れども、人や愚かにして常に以爲らく、活動の意氣永く亡ぶることなく、紅顔永久に華の如くなるべしと。その自ら今日ありて明日なきに思ひ至らず、今日の得意また明日あるべしと誇る。あ丶何ぞ慮ることの淺き。紅顔褪め易し、一度去りて又歸らず。之を思へば、水の流れと人の身ほど哀れ深きは無し。今日天の高きにまで上げられし身の、あ丶明日は陰府の底にまで墮とさる丶を如何せん。人高く稱して萬物の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

長なりといふも、不老の靈藥は遂に之を塵の世にもとむべからず。頼むまじきを頼みて、抑も、何れの日まで樂しまんとはするぞ。

昔し佳人あり、帝の寵を受く。一朝病に犯されて起たず、將に死せんとして而も帝の之を見んとするを謝して曰く、妾の容色昔日の如くならず、悲しむらくは、厭はれて愛を失なはんことを。嗚呼、何んぞ可憐にして悲痛なるや。人間相思ふ所のもの、もしたゞ如斯きに止まらば、浮雲の散り易く、開花の飄せやすきよりも尙心細かるべし。

人あり、朝貌の生命の短かきを恨みて慰さめて曰く、嗚呼、何んぞ其の短かきや、朝たの裝ほひ夕べを待たず、一日の色翌る日に無しと。然れども、花は寧ろ人の尙ほ短かきを歎かんとす。朝貌の色は紙にうつして久しく保つべし、人の容色は殘るべきや。朝貌の花は必らず實るべし、人のさかりは皆な結果ありや。

余、時として路上の少男少女を見て泣く。其の無邪氣に裝ほひて色をてらし、相思はんとして連りに彩どる。喩えば、日ぐらしの善く鳴きて夕べを知らず、かげろふの善く飛びて夜を思はざるが如し。人生百年に超え、紅顏萬年につゞき、戀に變りなく、相思ふに動きなしと思ふらしき、何んぞ其の稚氣の不惑なるや。

白髮の老年、顧えつて人生を思へば、笑ふべく、泣くべく、嘲けるべく、悲しむべし。春宵に燈火をかゝげて花を賞すべくば、暫時の紅顏に色を托して相思にあくがれんとの亦可なるに似たれど、人生百年老の來らざるが如く、たゞ茫然として壽の縮むに顧みざる寧ろ可憐ならずや。

語ばを寄す、紅顏の美少年。速かに白骨を夢みて、人生の眞面目に反れ。戀は一時にして、色は翌たを待たざるものぞ。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

◎家なき我れ

芦寬の子

妻あり　子あり　家なき我れ
友あり　師あり　家なき我れ
戀あり　火あり　家なき我れ
天地悠々　宇宙洪々
あゝ　三界に家なき我れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

社會主義の結婚及び家庭觀

赤司曙花

社會主義は二十世紀の一大問題なり、經世家は論を待たず、よろしく萬民の注目すべき好題目なり。婦人論はた二十世紀の一大問題なり、社會學者は論を待たず、よろしく萬民の留意すべき好題目なり。この社會主義が婦人論の一分岐たる結婚及び家庭に關して如何に思考するか、これ至難の論題たり、未だ深き研究をなさずしてこゝに武斷案を下さんとする既に大早計たるを免れざるも、一の問題を提出する考にて少く論評を試みんと欲す。

社會主義は一の架空論なり、實行すべからずとなすものあり、されどこの論客や今日の社會事情が如何程までに社會主義を採用せるかに盲目なるものにして共に論ずるに足らず、社會主義既に社會制度の中に種々なる形式を有して實行活用せらるゝ以上は社會主義の理想が實現せられんことを望む決して是れ、空中の樓閣に非ず、こゝに社會主義實現せられんか、今日の婚姻と家庭とは非常なる危險の狀態に陷り、資本國家に所有せられなば婦人も共同となり、子供も國家に養はれて兩親の感化を受けざるに至るべく、男女間の道德紊亂して貞節の美德滅び、遺產の制滅びて家庭を思ふものなきに至るべしなど、婚姻及び家庭の觀察點よりして社會主義を疑ふものあるを見る、社會主義實行せられん日は果して論者の想像の如きものあらんか、否らざるか、今日の婚姻は果して理想的に實行せられをるか否か、遺產制度なるものは果して善美なるか、あらずか、いで之を論ぜん。

婚姻は男女相愛の結果にして、神聖なる、高潔なる戀愛の現實せるものたらしむるは、婚姻に對する吾人の理想なり、今日の結婚果してこの理想に適合したるものなりや甚だ疑しむべきこと尠なからず、資本專有の經濟制度、社會組織の事情の下に在りて一家を經營するや必ず幾分の資產を要す、家庭の幸福は夫婦の相愛其中心たり、されど財產なき家庭は幸福の大部分を削滅せらる、既に家庭の幸福に資產の必要ありとせば、否婚姻なるものに既に多少の婚資を要するとせば、結

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婚は男女の相愛のみによりて既に其典を擧ぐること能はざるの事情起らずや、家庭を營み、子孫の敎育に對して幾分の敎育費を要するとせば、必ずしも高潔なる戀愛の情相互にあるも婚姻をなすこと能はざるに非ずや、佛國の事情に鑑みて吾人は瞭然として怖るべきもののあるを發見す、否日本今日の狀態を見て恐懼措く能はざるものあるなり、相愛せる男女が共に家庭を作ること能はざるは佛國及び獨逸の狀況ならずや、彼等の中には二十年も許嫁して未だ共に樂しきホームを營むこと能はざるものあり、わが現住する土地に來りて婦女子の實情をきくに、殆ど處女期の靑年女にして處女たるものなしと、其風俗の淫靡なる其一原因ならんも、否この淫靡なるさへ既に婚資のために靑年小女が淫をひさぐことによりて助勢せられたるを思へば亦資本專有制度の害毒の、如何に怖るべきものなるかは喋々の辯を要せざるものあるに非ずや。

婚資のために靑年小女の淫靡なる風俗を助勢する、誠に憐然たる事情として彼等に同情を表すべきと同時に道德上の點より觀察すれば尚ほ非難すべき一大罪惡たるを免かれず、而かも身は相當の敎育を受け、大學等の課程を踏む、一箇の見識を備へたる堂々たる紳士にして、少しの高潔なる愛情を解せず、婦人を慕ふの情を有せずして、單に金錢のために資產家の養子となり或は資產家より妻を迎ふるもののあるに至つては禿筆を呵して彼等が非倫の甚だしきをせめざるべからず、而かもこの非倫の事實天下の大勢たるに至つては誰か、人心維危、道心維微なりと長大息せずして止まんや、最大多數のこの非倫を敢てせしむる原因の何たるやを問はば、吾人は今日の經濟組織、資本專有制度に基すと答へざるべからず、社會主義の唱道せらるゝ只此一點にても、既に充分なりと云ふも敢て誣言ならんや。米國の勞働局は、米國に於ける離婚は經濟的なるもの其最大多數なりと報告せり、わが日本も離婚數の年々增加するものあり、この忌むべきの現象亦經濟的の原因よりするもの最大多數を占む、戀愛の故に非ずして資產と婚する沒德漢の家庭に風波の絕へざる、常に破鏡の歎を發ずる、これ當然の結果ならずや、虛僞的結婚が當然納むべき收穫は忌むべき離緣ならざるべからず、斯る離婚的國家の前途を思はゞ淚の滂沱たるを禁ずる能ざるものあり。資本專有制度的社會の事情を考察すれば、豈これに止まらんや。（未完）

當世風の嫁御寮

（上）

田舍嫁

花の都の嫁御寮は揃ひも揃ひし孝行者にて、山深き田舍の姑は皆安達原的惡婆とは极めたてき浮世の樣や、東コートは重からと斥け西洋料理はお歯に合はず、避暑避寒はお足に適はぬとて、孝心深き當世の嫁御寮、新調のコートに羽衣ショール、名も知らぬ可笑き物に兩手を入れて、古ひ肩掛と手袋はお母樣にと姑への送物、西洋の老人は食はず呑まずに居るものか若夫婦直向ひの食卓にはスープにビフテキ、シチウにオムレツ肉のパイ鳥の丸燒ケークにアップルと所狹きまで押並ぶに、御隱居方のお膳には菜葉におからお豆腐位が此上なき御馳走お肴は朔日十五日丈とは情なや、轉地靜養とは手甲脚胖草鞋がけにて山坂越ゆる事とおぼすにや、汽笛一聲新橋を離るれば行く先々に汽車電車人車の通はぬは富士山のみ、あながち御歩行の要もなからんを探偵小說に眼を晒し給ひしお嫁樣は砒石を毎日食事に加へて次第に殺すの術さへ熟知し給へば粗食に身躰を衰弱せしめて寒暑の劇變にコックリ往生お日出度くなるを待ち給ふにや。

田舍に生れ田舍に育ち田舍に嫁き夕顏棚の下涼みに家族の團欒を樂む我身とて、何女學校某大學など厳めしき門くゞりたる事もなく、海老茶袴はさて靴踏み鳴せし事もなけれど、倫理とやら六ヶ敷學課の內には長を輕んじ親を踏みつけにせよてふ教のあるにや、世に學者のお孃樣は之も當世あれも西洋風とて親御の仰せらるゝ事などは舊弊野蠻と一も二もなく却け給ひ、女大學今川などにて育ちし者が文明の教育受けし我等の心情を解せんやとて、劍もホロゝに叱り飛ばされ、ラバー、アイドル、エンゲーヂメント、など母御に解せぬ事を談り給ふに、今の娘は呆れた者、とても私の手にいかぬと閉口なされて居らるゝとか、まして一度人に嫁せば兼て學びたるは今日の爲めぞと、數理も語學も文學も美術も家政も躰操もいざ實用にとの意氣込にて第一着に家庭の改良、桐胴の火鉢はストーブに、坐蒲團は椅子に、膳は食卓に、夜具はベッドに、御飯はパンに、お汁はスープにと、家中改革を行ひ給ふとも改め難きは舅姑、之が僕婢に代つたならとは人に知らぬ御歎息の種、されど此の所謂とて六ヶ敷からず既に西洋に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は、親子別居とか我儘者が編み出した難有き習慣のあるとかにて、理想を實行し善美なる家庭を作り夫婦の愛情を密にし子供の教育を完ふするに、あんな不解家の親御が有ては、第一に貴君の不面目、妾の苦心も水の泡、子供を大切に思召しスウヰトホームを望み給はゞ、妾の眞心を少しは察て被下るなら、此願ひをと鼻聲に訴へ給へば妻君思ひの旦那樣忽ち之を御採用なされ親同胞は不用な者長く行けがしとの御言葉に姑小姑恐れおのゝき、一向嫁御寮の御機嫌大事山の神に祟りなきよふ、貴女は實に貞女で孝女持つべきものは嫁なりけりなど云ひ給へば我こそ日本一の淑女の摸範廿世紀の女を見よと低き鼻うごめかして何會の幹事某會の委員と家を空にして奔走し給ふ。

婦人は劇の保護者ならずや

（壯士芝居撲滅論）　　香　栄　子

曾てバタ臭き學者共の一團が、演劇改良會なるものを起し、各手に杓子定規打ち振り、己が一知半解の美學上の智惠を以て、日本固有の芝居の美を破壞せんと計りしことあり。幸にして人言に致され易き公衆も、本來の嗜好は容易に動かされずして、幕なし、木なし、花道廢止等の改良論も、これを事實たらしむる程の力なくして終はれり。されど此の種の盲動はこのまゝにして止りしにあらず、一たび壯士役者の出て、これが次で新演劇と改名せしより、このバタ連の一團は、無二の擁護者として壯士俳優等に聲援を與へつゝあり。加ふるに赤門を出でゝ間のなき學者等は、自己の低き趣味より壯士芝居を二なきものと思ひ、恰も豐國の牛鍋を以て日本第一の御馳走と信ずる程の熱心を以て、この淺墓なる壯士芝居を歡迎す。曾て燒芋を皮ぐるみ食ふ薩摩武士等の爲に、權勢を壟斷せられ、併せて趣味風俗を打壞されし日本は、更に赤門學者等の爲に、世界第一の優等劇たる日本芝居の特色を容赦なく破壞せられんとせり。薩長の田舍武士は、無學文盲なりしだけ、その命とする所色食の二に過ぎず、故に彼等の蹂躙に任せしもの、料理茶屋、待合等の一種の社會に過ざりけれども、赤門派の學者はこれと事かわり、學問するだけ、社會が凡ての問題に發言權を許容せしだけ、其害の及ぶ範圍極めて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣く、音樂、繪畫、芝居等有ゆる美術のさま〴〵、皆多少それが猥雜を被らざるものなし。わけて芝居は最もこの危運にかゝり、殊に團、菊二名優の物故に會せしかば、玉乘の曲藝に毛の生たる如き壯士芝居の面々、機乘すべしとなし、一面文字を解して趣味を解せざる所謂文士なるものを後援とし、盛にその旗幟を張らんとせり。アヽこれ實に吾が芝居道の一危にあらずや。

前に赤門派といへるは少しく語弊なり。ひとり赤門黨のみならず、凡ての學生、即ち未だ學校に修業中のもの、若くは學校を出てゝより時日を多く經ざるものにありて、趣味の上の助言を叩かんとするは頗る危險なり。今の學校は趣味を敎ふる所ならず、まして趣味は味ふべくして知べきものならじ、慣ふべくして學ふべきものならじ。學生は靑表紙の上の人なり、理屈の上の人なり、決して趣味の人ならず。若し偏に趣味の發達の上よりせば、そが下宿屋の主婦、牛肉屋の給仕女は、ケーベル博士によりてハルトマンの美學を講じ、大塚博士によりてヘフテルの美術論を聞く學生諸君よりも、遙かに遙かにその耳と目とが發達し居るならんか。さればこの種の人々が持囃す新演劇の價値なるもの知るべきのみ「濱子」「黑潮」等の耳目になれし題名に誘はれ、一たびその場に入れば、見る所のもの悉く豐國の牛鍋の如く、直に胃袋に入りて消化すべきもの〻みなり。彼には下座の囃子なし、大薩摩なし、床なし、型なるものなし。然れども登場の人物、凡て日常見る所の種類の人、左なくも自己の愛讀する小說中の人物に過ぎず、その場所、その談話、亦皆これならざるなし、何如ぞ拍手大喝采せざるを得んや。即ち壯士芝居の學生間に歡迎せらるゝは、解し易き爲なり、自己の低き趣味に合したる爲なり、豐國の牛鍋的なる爲なり。こゝに於て薩摩汁が薩長の勢力になりて江戶風の割烹を壓したるにひとしく、新演劇の勢力は學生等の後援になりて、日本在來の芝居を壓し去らんとす。恐るべからずとせんや。

故に吾輩は好良なる趣味を保持せんが爲め、日本美術の爲め芝居道の爲に、勉めて新演劇と稱する壯士芝居を抑へて、所謂舊演劇なる日本在來の芝居を復興せしめんと欲す。これに就て第一にその味方として賴るべきものは今の婦人諸君を措て他あらず。世間婦人の膝下に跪き、婦人諸君に向て哀請す

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る男子の言を聴け、彼等は皆ひとしく言へり、婦人は美の權化なりと。婦人は美の神なり、美の權化なり、而して劇は美術の粹なり、かくて婦人は劇の守護神たらざるべからず、これ諸君の先天的任務ならずや。されば趣味と敵なる壯士芝居の跋扈を防ぎ、日本固有の芝居の長處を保持し、發達せしめんこと、實に婦人諸君が避くべからざる義務の一にして、その咽喉の張裂くるまで千言萬言、その纖手の勞れ果つるまで千揮萬揮、吾が芝居道の爲に盡さるべきは寧ろ當然の事なりとす。吾輩は實に諸君の力によりて、日本國民の趣味の墮落を、薩摩汁より、牛鍋より、はた壯士芝居より救出されんことを切望す。

料理道

生間正起

鱈の吸物

鱗を去り能く洗ひて小さきは薄く身を小口切りにし大きければ二枚に削して恰好に切り薄身は何れも去り食鹽を少し撒點して暫く置き洗ひて鹽鱈なれば水に漬けて鹽を拔き鹽の強きは湯煮して後ちよき煮汁にて煮醬油にて調味し薄昆布を添へ器に盛りて汁をはるべし。

蕪蒸

蕪菁を山葵卸にて卸し水氣を絞搾し去り茶碗に薄味を付けたる百合根、銀杏、麩、茸、炙したる魚鳥の身などを混入し之れに燒たる鰻を加へ其の上へ右の卸したる蕪菁を入れ能く蒸して其の上へ調味したる熱き葛引の汁を注ぎ聊か山葵を添るべしこれは蕪菁を賞味するものゆえ蕪菁の少なきは宜しからず。

鷄肉南蠻

葱を一寸五六分に切りて縱斷し或は斜に切りたるもよく空煎をなして置き鷄肉の好き切り身ばかりを暫く醬油に浸し之を調味したる煮汁にて煮其汁にて右の葱を煮て身に取合せ胡椒か山椒の粉を添付すべし鴨の身にても右と同樣になすべし鴨を用ゐればこれを鴨南蠻と呼ぶなり。

此の南蠻は關東人の口に適せざるゆへ關東人に饗する時には葱を斜に切りて空煎せず胡麻の油にて煎り之に熱湯を注ぎ調味したる煮汁に砂糖か味淋を加へて一度煮たる後ち鷄

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

肉を煮たる汁にて再び之を煮て身に取合すべし。

都て關東人は油で揚げたるもの、甘く煮たるものを非常に嗜み淡薄にして何となく旨いといふ料理を好まざるゆへ調理をなすものは常に是の心得肝要なるべし併し料理法の本躰よりいへば淡薄にして美味を有する樣に調理すべきものてあるが處粹れば風變るて致方なき次第である。

試みに關西人と關東人と嗜好の異なる一例を擧ぐれば關西人が酒樓に登れば必らず先第一に命ずる者は作身に何か淡薄した吸物といふを關東人は天麩羅に旨煮といふがお極りてある斯の如き濃い味計ては酒を飲めぬゆえそこで酢の物や、あつさり漬物の必要が起て來るのであるが食膳には漬物が必要品てあるけれど酒樓て酒を飲むに第一番の肴に漬物とは少し茶番の樣なれど關東人は平氣てある渾て人間の品格は嗜好品て判斷する事が出來るといふが讀者は以て如何となすや。

「田舍版」樣の御宿所か　出張所まで

雜錄

旅窓漫筆

在相州　山　月　子

（一）玉を抱いて罪あり

去年四月九日、我れ羽前最上の高湯にあり、某大名の御家騷動記を讀む、豆腐屋の娘、一躍して大名の愛妾となり、己れ先づ墮落し、大名を墮落せしめ、其奥方を自殺せしめ、結局己も不幸病死するに至れるを見る、嗚呼小人罪無し、玉を抱いて罪あり、幸即ち是れ不幸、境遇の激變は、此無教育の美女をして、斯の如くならしめたり、因て思ふ、我が其秘奧に進まんと欲する大靈地、我に準備の成らざる時、忽焉として之れに入得せば、其激變は我が靈性を撹動して、或は不測の禍に陷らしむるに至るも、未だ知るべからず、靈寶妄りに下賜せられざる所、是却て天父の恩寵なりと、感之を久しうせり。

（二）默　想

超えて十一日、獨り靜坐默想す、夕陽西に沒して、四面漸く暗憺、半眼を開いて徐々三昧に入る、既にして前面の杉頭、忽然として明光を放つ、漸くにして眼下の家屋、悉く輝き、漸くにして黑き欄干、亦爛然として光を發す、心塊々として歡喜、身に溢る、漸くにして我に返れば、四顧既に暗黑、靜かに坐を立てば、下婢燈を點じて入り來りぬ。

（三）悟り濟ませる婦人

嘗て某々氏に伴ひ、悟り濟ませる婦人某氏に面しぬ、其洒脫にして、眼中有髯男兒なく、一笑一語、舌頭に我が友を翻弄する處、眞にエラシと思はざるを得ざりき、然れども飜つて思ふ、彼女が女としての美、何くに在る、且斯の如くなればとて、男子は之に恐れ入る者に非ず、寧ろ如かんや、女は女の美を存し、靜淑優婉を存せんにはと。

（四）虛心なること難し

某禪師の印可を領せりといふ人、十年參禪せりといふ居士、其他一二非凡の人に會す、其人虛心ならば、決して誤ること なかるべしと思ふことを誤り居れるを觀る、嗚呼人、虛心なること難し、虛心即ち淸心、淸心即ち明心、我是に於て乎、修道の決して忽せにすべからざることを知る。

（五）人氣の昇降

角力の人氣の年々變り行くを見よ、靑年が現存の人物を崇拜する狀も亦然り、喝采せられて嬉しと思ふ者、惡評せられて腹立しと思ふ者、何ぞ角力を見て悟らざる、靑年の士、多く感情に由りて、人を毀譽し、褒貶す、是れ喜怒をなすほどの價あらんや。

（六）天何をか言ふや

家庭の內に於て、法律とか、行政とか、ヤカマシキ說をなし夫婦の權限は如何、其呼び方は如何等の事まで議論し、以て文明風の家庭を成さんとする人あり、是れ果して樂しきや否や、他人は知らず、我は斯の如き家を好まざるなり、天何をか言ふや、四時行はれ、萬物育す、天何をか言ふや、夫婦相愛し、論なくして春風習々、天何をか言ふや、夫婦相敬し、說なくして秋氣肅々、一家道を奉す、何の議論をか要せん、請ふ其本に反れ。

（七）道器に非ず

酒と烟草とを禁じ、女郎買、藝者買をせず、以て自ら信仰堅固、道德方正を誇る基督教徒あり、基督教徒の能事、これに終れりやと問へば、曰く、然り、是れ西洋人の貴む所なればなりと、酒を飲み、烟草を喫し、女郎を買ひ、藝者に戯むれ、以て世態人情に通じ、大道に達せりと誇る修業者あり、得道の士、斯くの如きかと問へば、曰く、然り、西郷南洲も妾を持ちたり、横井小楠も、勝海舟も、隨分花柳界に明かなりしと。三歎す、形を學ぶ者多くして、神に入る者少なきことを。聞かずや『丈夫自ら衝天の氣あり、如來の行處に向て行くこと勿れ』と、西洋人何者ぞ、南洲何者ぞ、海舟何者ぞ、此意氣あり、此見識あり、以て始て彼等の長を得べし、其長を得ずして、其短を學び、其の美を得ずして、其醜を習ひ、其神に達せずして、其形に着す、是れ道器と謂ふべからず。

（八）神の見給ふ我

世人の見る我あり、友人の見る我あり、師の見る我あり、父母の見る我あり、妻子の見る我あり、我の見る我あり、更に神の見給ふ我あり、嗚呼我れ凡骨、道に入りて以來、十有四年にして、始めて神の見給ふ我が眞價、眞位地を知ることを得たり、如今假令我が師にして、或は我を誤ることあるも（此事決して無しと雖も）假令十年の交友、我を誤ることあるも、假令天下擧て我を誤ることあるも、我斷じて我が自信を動かさず、『二人の證は眞なり』との聖言、『天下の老和尙の舌頭に瞞せられず』との古語、我今にして之を味ふ。

（九）新年所感

問ふ者あり、曰く、新年に入りて何の新感かあると、我答へて曰く、無し、日は東に出て丶西に沒し、風は寒くして火は暖か、富士は白くして松は緑なり、基督の畫像に對すれば、恍然として愛慕禁じ難きを覺え、師友の情誼を思へば、陶々として樂極り無きを感ず、新聞紙を手にして、最初に見る所は、日露の交渉なり、聖書を繙きて、第一に祈る所は、大和民族の救はれんことなり、時に西天を望んで、故山の老父と、妻子とを見んことを欲するのみ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

日記の一節

柳子

あゝ菫枯れぬ

海に多くの趣味を有てる我性癖、汽車に揺られて僅かに、三四十分路の、目なれ馴き慣れたる茅海の浦波、此寒空に扨も物好きよと、笑ふ人々の聲を後に、絶て久しい心地を、二週間振りに、愉快しい懐しい濤の音を聴くべく、彼の浦に行きました。

空は小春の晴れてはありながら、昨日に似ぬ風の冷たさ、とは云へ海は穏やかに、見渡す限り渺茫たる一面、洋々と宛ながら油を流せしかのやう、紀淡の海峡より斜に、明石にかけて悠やかに横臥せる淡路の島、今や最中の夢の如く静かに、六甲、鐵拐の峰、折柄の日影に照らされて、呼べば答へん間近さ、水天遙かに輝々と舞ふ小波の、平和を謳ひて、秋の詩神の今神秘を囁くかとばかり、今更斯く神の能力、雄大無限の恩惠、感謝の念は遂に濤と共に和せざるを得ませんでした。

一刻々々観る目新たなる光景、飽かず立盡したは殆んど一時あまり、足を返へす機、フト見れば其處に、まだいと小さき松の根方に、扨も床しや、愛らしい菫花一本、日毎夜毎の潮風にも、褪せぬゆかりの色美しう、小さい笑顔を三つまで並べて、今まで心も付かでありし此方の無心を、莞爾やかに打眺めて在る風情の。

あな愛らしの菫、美しい優しい花よと、馳け寄りて觀れば見るほど、あゝ誰がゆかりを色にしての此姿、扨も可憐や、懐かしの花や。

冬枯れ近い此浦はの、来る人とては此濱に生活求むる荒くれ男ばかり、よしや瞥見の、それと知りたりとて、誰か憐れと訪ひ寄らう、床しと愛つる人の有りや否や、惜ら色香を寂寥々たる、朝も夕べも汐風に晒らして、徒らに枯死の運命を待たせる事の、げに哀れ〳〵、如かず都の空にせめて彼女の誇をと、根ごしに曳て吾家へ移したは十日の前でした、が思へば、あゝ抑もや彼の女の、是れが幸か、將た不幸なりしか。

吾日課は増へました、乍去現か、幻か、云ひ知らぬ希望に胸温かく、いかに樂しう床を離れたてせう、毎朝勤務に出る前には必らず彼の女に接し、生々と其幸福に満されたるらしき笑顔を見る愉快さはいかばかり、而して一日の職務果て、

家路に向ふ其瞬間の、あゝ如何に樂しかつたでせう、歸れば彼の女は、今朝咲きたるまゝ、窓に近かく折柄落方の日影を硝子越しに浴びて、一入冴ゆるゆかりの色美しう、匂ひ溢れて居るのでした。

愛らしの者よ、懐かしの友よとのみ、二日三日は斯くして過ぎぬ、四日目の朝でした、例日の通り彼の女いかにと行て見れば、是はいかに〳〵、一輪はや萎れんとして、褪たる紫の色淡く、空しく首垂れて居るのでした、水足らざりしか、夜氣の、いたいけな彼の女に、餘りに冷たかりしにかと、少時は吐胸を衝きましたが、逝くものは詮もなし、殘れる花のせめて盛り久しかれよと、心に祈りて出て行きましたが、翌朝また一輪、遂に一週間目に、葉まで共に彼の女の姿は、運命の渦中に沒し去れて了ひました、哀れ〳〵、斯る短かい盛とは思ひ掛けざりしをと、最惜しの心に一夜は彼の女の萎れ果てたる姿を眺めて明しましたが。

越て三日、風こそ冷たけれ、輝然とさし來る日影の心地よげなるに、また誘はれて茅渟の浦邊に出掛けました、見れば、あゝ、噫、前には心も着かでありし、小草の中に、其處にも此處にも笑顏滾せる菫、散りたるは早や實を結んで、また來ん秋の準備をして居るのでした。

今となりて返らぬ繰言ながら、思へば鈍なしの吾心かな、何故可憐の彼の女を根こしになぞしたでせう、何と思つて、彼の女の爲には吾手は實に運命の毒手ではなかつたでせうか、彼日彼時、愁じ都に移さゞりせば、彼の女は今見る其友等の如く、今日も美しい色に誇て居たでせう、よし散ればとて生れたまゝにだにあらば、彼様も空しき枯れやうはしなかつたでせう、必らず立派に實を結んで、來ん秋には一入愛らしい色香に咲いたでせうに、生中憐れと思ふたのが、噫、噫、彼の女の爲には此上なき不幸の極なりしよ、とは云へ彼の女に依て或教を會得しました、無心の花、あゝ菫は枯れぬ、深き感謝と、吾此念ひ、せめて手向けにと、日記の端に殘しました。

中心如啞鬆成絲、飄零無復故人與、宮昔時見儀鳳窠、
空堂雖營滌子被、菊花久負陶家籬、零丁困厄涉炎暑、
正氣竊與文山則、衰殘突異沈舟羽、寸心誰憐向隅歎、
陰陽消長自有數、日月未必無盈虧、區々禍福何是怪、
百年世事一場夢、堪笑悠々輕薄子、終身諾々又唯々、
昨夜乞哀驕白日、金鞭銀鞍白馬騎。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

言行分析表

謙卆

近世の學術進歩の發達が著しき所以のものは職として分析解剖術の開けたるに由るといふも過言にはあらざるべしと思ふ而して歴史上人の言行に繋るものは今も猶史家の大綱を評論せるに止まりて未だ新式の解剖術を應用したるものを見ず是れ斯學の缺點にして又社會の虚隙たるを免かれず中には史家の犀利なる眼光の視線に射透せられて其の眞を遁るゝ所なきものもあらふが併し是れとて未だ古風の推測式に依るものにして科學的分析式を用ゐざるが故に實質中史家の商量に上らずして空しく塵滓と共に遺棄せらるゝもの尠なからざるべし遺憾と謂つべし故に余は今試に十九世紀以來發達せる分析解剖の式を此の人事に應用し古人の言行を解剖せんと欲す若し其れ醫學に顯微鏡的解剖の必要なるを知る者は人事に於ても亦靈知的解剖の必要なるを諒せん而して其の言行中幾何の滋養分が存在して能く人を泣かしめ笑はしめ悲ましめ喜ばしめ竟には人間として最も嫌忌する死を見る歸するが如く身を死して己れの用を爲さしむるの効果を奏するを證擧し得ば此擧も亦無用にあらざるべし而も是れ古今の大業若し夫れ此の事にして一々證擧せられ此は善彼は惡と明白に指點せらるゝを得ば人間行爲の大半は確定せらるべきことにしあれば固より譾陋余の如き者の企及すべからざるは余の疾く知る所なれど若し此の式一たび定まりて後の名匠の微を盡し粹を窮むるの秋來らば又聊か人生に稗補なくんばあらずと云爾。

(1) 藩翰譜酒井忠次傳

徳川殿も都に上り給ふべしと議せらる酒井忠次此事ゆめ〳〵然るべからずと諫む御一門の人々を先として譜代相傳の御家人等皆此議に同す。

是れ關白秀吉より家康へ度々上洛を勸められたるにより家康其の乞ふに應ぜんと議せられたれば酒井忠次を始め皆々不可說を主張したるものなりと彼等がいかに主家の爲に大事を取りしかを想察するに餘りあり而して斯くまでに氣を一致にして且大事を取るに至るは偶然にあらず乃ち家康が平素士を養ふに心を用ふるの深きを察するべし。

徳川殿聞召てかた〳〵申止る所神妙なり。

此の一句は假初ならぬ口調なり菩薩の四攝法中の愛語攝にも當つべきかとにかく人を用ふるの士は毎に此意を失ふべからず。

當時君臣の關係は天淵も啻ならず而も尙家康は毎に此口調を用ふ況や今日をや。

家康はおもふ子細ありたとへ關白にあざむかるゝ事ありともくやむべからず。

おもふ子細あり是れ成竹既に定まる所謂爽の思ふ所にあらず而して關白にあざむかるゝ事ありともくやむべからずとは何等の氣魄ぞや義を見てせざるは勇なきなり男子須く斯の磊落の氣宇なかるべからず徒らに利害の計較をのみ事とせば尾を怖れ緖にをじて終身碌々なすとなからん大成功は常に智識的計畫以上にあるとを知らざるべからず。

先人のかほどまてに我心をとらんにはなど其の心には答ざらん。

英雄の多血多情なる所今の所謂多情多血は多くむだてに乘る甘言に欺かるゝ等なり古への義と俠とを本とするものとは其の撰を異にす注意せざべからず。

且は家康關白とたゝかふて東西に軍さ起るともかたく心を一になして戰はんに何程の事かあるべきさりながらかたんと思ふ事にもまけ負けんと覺ゆる軍にもかつ勝負は必とさだめかたきはおよそ戰の習なり。

君臣一致金石透底の大段を定め而して勝負の必とすべからざるを說きて驕兵の弊を戒めたる用意の周密なるは感ずべしと雖も殊に注意すべきは實戰の經驗より生じたる確說にして、學者の徒らに机案に對し古書を涉獵し拈出したる空論と同視すべからざる所に妙味存すべし。

抑我朝二百年に及びて四海ことごとくみだれて人心一日もやすからず然るに今世すでにやゝしづかならんとするに臨み東西又軍起て月をかさね年を積は我國々の事はさておきぬ天下また亂れて人民ことごとくほろびうせんと尤も不便の至也されば罪なふしてうしなはれん者共のために家康一人が代て死せんとなんぼうゆゝしきとならずやかたがたも此旨を存知してよし那き罪つくりせんと思ふべからずと仰ければ。

斯心乃ち家康が群雄環視の裡に後に天下を掌握し克く三百年大平の基業を成したるもの要は唯仁の一字に存す區々

たる高名心何かあらん世の只管らに豆つぶ程なる智識を恃みて權謀術數を事とし絕て天下の大歸てふとの何ものたるを知らざるの徒三思して可なり。

忠次かしこまり承りてさほどに思召し切らせられん上何事をかさらに申べきさらば御上洛あるべくとぞ申ける。

此の家康忠次の應答に依て察するに彼れ君臣等の間は平素毎に理に因て動くものたるを知るべし故に命じ易く從ひ易し是れ能く君臣の間扞格牴牾せずして同心一體の用をなす所以平之をかの意に任せ情に馳せて億萬の心となるものに比す同日の論にあらず。

關白殿御上洛あるべしと聞給ひ御家人等に心をやすんぜむがためなりとて大政を岡崎に下し給へば忠次德川殿の御供して上洛す御見參の事終て頓て歸らせ給ひけり。

英雄英雄を知る彼れ兩雄共に時を同ふして各處に雄視す如何ぞ其性行氣質互に相計量熟知するなきを得ん其性質を知り而して其事を斷ずるに理義を以てす恰も嚢中の物をさぐるの看あり理義とは即公なる誠なる一毫私欲の念を混せざるの謂なり。

英領印度帝國（下）

横井時雄演

氣候のことを申上げますが成程南の方は熱い、南の方は北緯入度て赤道の下てありますから熱いのでありますが北のベシヤアルは筋を引いて見ると岡山か紀州位に當つて居りますからそんなに熱くはないのであります、けれども海岸は熱い、孟買なども冬も春秋の衣服を着て居りまして冬の衣服は着るやうなことはない、カルカッタからガンジス河の低い所は冬になると春の衣服を着て居る、デリーから北に往くと寒い、パミールは雪が降る、私は薄着をする癖がありまして澤山衣服は着ませぬが滊車に乘つて居つた時は中々寒い、そこで外套の襟を擴げて居りましたから帽子が其襟の爲に少し浮いて居つた、其處へ風が吹いて來たから持つて往かれたので其帽子は後て拾つて置いて吳れましたから今でも大事にして冠つて居りますが其實金が無いから買へないのであります。

それから人種に就て一寸御話致しますがモンゴールと云ふ支那人みたいな奴が此方から這入つて來た(地圖を指し說明す)又此方の方からドラビジアンの人種が這入つて來た、それから此方から蒙古人種が這入つて來た、さうして此方から這入つて來たアリアン人種が黑人種をチパールとか緬甸の方に追込んで了つたのであります、アレキサンダーが這入つて來た時もアリアン人種が這入つて居りましたから人種に於ては在昔今と違ひなしだ、それから此邊から釋迦が出たのでありま す、紀元千五百年頃はアリアン人種が擴がつて居りましたが、それが段々混じて了つて今ては一番多いのは印度人と稱する即ち雜種てあつて印度人とデラヴアンと云ふものが一緖に混じたもので、それが今日は一億三千五百萬程ある、さうして以前の純粹の印度人種の系統を保つて居るものが二千萬程あるマホメタンが六千萬程ある、それて印度の言語が二十八ありまして一般に行はれて居るのはヒンドスタニーと云ふ言語てあります、それは波斯語と印度語と混合したもので波斯人と印度人と交通して居る間に兩方の言葉が交つて印度語とも附かず波斯語とも附かないものが出來た、それがヒンドスタニーてあります、ボーイを傭ふにも兵隊を指揮する時にもヒンドスタニーを用ゐますが法律などは英語を用ゐる、サン

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

スクリツトは非常に發達したものでありますが今ではそれは死んだ言葉になつて居ります、それからペリー語と云ふものがベンガールの北に起つた、此ペリー語は佛經の經典の為に今日迄存在して居る譯であります。

どうしても印度のことを云ふには宗教のことを言はなければなりませぬから一寸御話致しますが印度の宗教と云つたならば所謂印度教でありますが印度教と今日稱するのは佛教ではない、印度に往けば皆な佛教が存じて居るやうに思ひますが佛教と云ふものは今日印度にはない、錫蘭と緬甸に傳つて居る佛教は紀元前五百世紀に興つて紀元後千二三百年の間印度に發達したのでありまして一番盛んであつたのは七百年八百年頃であります、其間印度全體に流行して居りましたが其後印度から放逐されて了つて今では跡形も無いのでありますデシヤワルに佛像を見に往きましたが此處では佛像が皆なグリーキ人の顔をして居る、お釋迦樣が鼻が高くつて腰から上はグリーキ人であります、彼處は御承知の通り古くからグリーキ人が這入つて居りましたからお釋迦樣の容貌を自分流儀の顔に拵へて了つたのであります、それで今日存在して居るものは佛教に非ず一般に行はれて居るものは婆羅門教で其次がブラマ教でありますそれから一神教と云つて是は學者などが信ずるのであります、少し物を識つた奴に貴下は何を信じますかと云つて尋ねると私は唯一の神を信ずるのであると答へる、此處に斯んな偶像があるが之を信ずるのですかと云ふとそれは愚人が信ずるのであると答へる、普通の所は非常な迷信で淫猥な風が宗教の中にあるので淫猥に非ざれば殘忍であります、カリーと云ふ神は女神で顔が黒い日本の大黒さんはカリーの變化したものであると云ひますが日本では大黒さんを福の神としてありますが印度ではカリーと云ふ神は黒い顔をして黒い髪を垂れて居る、それで赤い舌をペロリと出して目には生首を珠數繋ぎに掛けて居つて手や何かは血だらけになつて神を拜む時は毎日羊や牛を殺して捧げる、昔は確に人間を殺して犠牲に供したに相違ない、之を以て見ても如何に殘忍であるかと云ふことが知れます。

宗教はそれだけにして置きまして是から私は英吉利の印度に於ける成功若くは失敗と云ふことに就て少しお話を申上げたい、先づ第一に英吉利の成功と云ふことを申しまするならば是だけの大帝國を亞細亞に於て三百年の間に造出したと云ふことは非常な成功に違ひない、未だ曾て印度に於て未曾有の大帝國である、三百年程以前にアクバルと云ふ豪傑が出た、此アクバルは成思汗の子孫であつて此孫のチモールの二代目位の子孫に當るバブールと云ふ人が印度に入つて帝國を造つた、蒙古人であるからモーガンエムパイアと稱して居るが寧ろ土耳古人であります、長い間中央亞細亞に居つて波斯亞富汗に混じて居りましたから純粹の蒙古人ではあるまい雜種であらう、今日では一層印度人と雜婚して居りますから我々みたいな蒙古人に近いものは發見しないのであります、けれども一時は盛んであつてアクバル大帝と云つては英國エリザベスと時代を同ふして居ります、併ながら今日の如く統一して交通の便を開いたことは未だ曾て無いことであつて、英吉利の第一の成功であります、それ迄は兵亂止む時がなかつた、一日も寧日が無いと云ふ有樣で互ひに諸侯が戰爭をして居りましたが今では戰爭が出來ないやうになつて六百の諸侯が英吉利の支配に服して居る、徳川幕府のしたやうに昔諸侯が云ふことを聞かぬと國替を命じたり切腹を申付けたやうに今日でも云ふことを聞かぬと英吉利政府では切腹こそ命じないが直ちに位を讓らせて息子に跡を遣るとか又は領地を取上げて月給だけ與へて領地の無い大名にして置くと云ふことが今日行はれて居る、今では巡査もあり裁判所もあつて訴へることも出來それから交通の便があつて二萬五千哩程の鐵道も出來て居る、さうして印度政府の收入が日本の金で七億六千五百萬圓程ある、唯だ租税から取立てるだけが四億六千萬程ある、租税から取立てるだけでも日本全體の收入より多い、流石に大國であります、過去の十九年の間七ヶ年を除くの外は毎年國庫に剩餘金がある、一昨年の千九百二年の剩餘金が日本の金に換算して四千六百七十萬圓と云ふ高であります、それで私が日本に歸つてから後印度から送つて來た新聞を見ると印度政府では英皇の即位式を祝ふ為めに税を輕減すると云ふことが書いてある、鹽税が從來五百ルピー以上に課して居つたが今度は一千ルピー以上なければ課さないと云ふやうなことになつた、私は過日の即位式を見ましたが印度の六百の諸侯が實に燦爛たる金銀を以て飾つたる象に乘つて三百人からの兵隊に護衛されて往く所は非常な壯大な有樣でありました、其表面を見れば國庫には剩餘金があり、さうして國内は平和で皇帝の即位式と云へば印度の六百の諸侯がお祝ひを申上げるのでありますから此

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

上もない日出度い有様であります、表面だけを見た人は英吉利人でも亞米利加人でも實に英吉利の政治は能く行届いて印度人は満足して居るやうに思はれますが裏には亦裏があるのであります、先づ一番見易いのは黒死病であります、印度は非常な文明の政治が行はれて亞細亞大陸中印度のやうな開けた國はないのであります、然るに印度には七ヶ年程黒死病が續いて其爲めに諸君はどれ位の人が死んだと御想像になりますか、殆ど諸君の御想像に及ばないのであります、それはどれ位であるかと云へば七年間に死んだ人の數が二百萬人死んで居る、北海道が八十萬の人口である其倍の人民が七年間に死んで了つたのであります、宛然蠅の如く死ぬ、私が丁度二月上旬にカルカッタを立つて歸つて來ました時其時分の新聞に一週の內に印度人の死んだものが二萬二千九百五十二人其前の週間も是だけであつたと云ふ其位死ぬ者が多い、孟買に居りました時も今日は何百人罹つて居ると云つて平氣で居る、歐羅巴人も時に依ると罹るが重もに土人です。

次に印度の饑饉のことに付てお話致しますがどれ位饑饉に依て死んで居るかと云ふことは御承知の無い方もあらうと存じますから申上げますが今日迄饑饉の統計と云ふものは甚だ不完全で能く分りませぬが概算して見れば十九世紀の百年間に於て初めの二十五年間に於て五度饑饉があつて死んだ人が一百萬人、其次の二十五年間に饑饉が二度あつて死んだ人が五十万人、次の二十五年間には饑饉が六度あつて死んだ人が五百万人、それから最後の二十五年間に於て饑饉が十八度あつて死んだ人の數が二千六百万人之を十九世紀全體に合計して見ると三千二百五十万人死んで居る、實に餓莩路に横はる有樣であります、日本の維新の時の人口が三千万人でありますが、それだけの人口が饑饉の爲めに死んで居る、そこで非常な問題が起つた、印度人は段々貧乏になりつゝあるか金持になりつゝあるかと云ふ非常な問題が起つて英吉利の下院で質問が出た時に印度大臣なるハミルトン卿答へて言ふに若し英吉利が是程骨を折つて印度が貧乏になるならば今が今でも印度を引揚げなければならぬと極論して居る、素より貧乏になつたからと云つて引揚ぐる筈もないのでありますが、それ程迄言ふて居るのであります、扨てそんなら金持になつて居るかと云ふと金持にもなつて居ない、それは饑饉を見ても分かる何處の國でも凶作と云ふことはありますが饑饉と云ふことは容易にない、日本などでも其通りで奥州に饑饉はありましたが昔のやうな饑饉は今日はありませぬ、何故無いかと云ふと人民の購買力が増して居るから一年位凶作であつても金を以て他から米を買ふて暮して居る、印度でも昔は雨の降らないこともありましたけれども昔は貯蓄があつたから雨が一年位降らないでも凌ぐことが出來たが今は貯蓄が無いから直ぐ困難するのであります、それは印度の英吉利の地方官などが報告書に云つて居る、私の地方では人口三分の一は貧乏人であつて年中三度の飯も食べない人民である、さういふ貧民であるから凶作と云ふと初めの時から饑饉になると云つて居りますが其論は何と英吉利の人が云ふか知らぬが其議論には脊髄が難かしいだらうと思ひます、何しろ印度は非常な貧乏であるが一方、印度に出張つて居る太守は二萬五千圓も俸給を取つて居る、ベンガルの警視などは一萬圓も取つて居る、そんな風に澤山月給を取つて旅行でもする時は大勢供を連れて行く、さうしなければ宿屋に於て紳士の待遇をしない、初めは私も供の一人も連れて自分では大盗になつた氣で居りましたが中々さうでない二人や三人は連れて歩るかなければ誇るに足らない、さう云ふ風に贅澤をして居るのでありますから一方では益々貧乏に陷るのであります、それが日本人であればサア饑饉と云ふと大騒ぎをするに違ひないが其處が印度人であるから平日物を食はずに腹を空らして居ることは苦行で善いことであると思つて居る、それであるから人間が蠅の死ぬ如くに死ぬ、併し斯樣に澤山に死ぬのは英吉利政府が世話をしないから死ぬと云ふ譯ではありませぬ、過る二十五年間に二千五百萬人死んで居る、其間に英吉利政府で費した救助費は一億二千三百四十萬圓であります、それにも拘らず死ぬのであります、是がどうしても印度人が貧乏になつたと云ふ證據であらうと思ふ、それならばどうして貧乏になつたのかと云ふ問題が起る、其問題に就ては二つの理由がある、どうしても貧乏にならなければならぬと云ふ理由がある、一は何かと云ふと此金貨の流出である、金が印度から英吉利へ流出て往くと云ふことである、先程も或友人が英吉利が印度を取る時は澤山な金を入れたのであらうと云ふ話がありましたが其實英吉利は一文も金を入れて居ないのであります、初めは商人が寄集つて株式會社のやうなものを拵らへて商賣して居つたが印度から取る租税を以て兵隊を養ふて戰さをして印度を蠶食して往つた譯でありますから英

吉利から金を出したことはない、之に反して印度から英吉利に這入つて往く金は夥しいもので英吉利の役人であつたモントゴマリーマルチンが千八百三十八年頃に計算した所を見ると此以前の五十年間に於て内地の廉い利子を加へて八百四十億萬圓の金が印度から英吉利に往つた譯になつて居る、八百四十億萬圓——もう一つ桁が上ると兆で我々は百年經つても兆と云ふ字などを唱へる必要はない、最近三十年の間に印度から英吉利に這入つた金が九十億ルピーでありますからそれを日本の金に換算して見ると六十億萬圓であります、一年に二億萬圓づゝの金が印度から英吉利に這入つて居る勘定であります、それは貿易で儲けた金でない、それは千八百五十八年に印度商社の英吉利政府の權利を取上げて了つたことがある、其金を公債にして英吉利政府に渡した、それが日本の金で二十億萬圓程ある、それの利子と、それから其外に私立の鐵道とか若くは茶業とか何や斯やで其樣な高になるのであります、資本を印度に卸して株主は英吉利に居るのでありますから皆な英吉利に金が往つて了ふ、それから英吉利の官吏——印度の高等官が取る金が一億萬圓許りある、それの三分の一位は英吉利に送つて居る、それから英吉利に歸つてから恩給を貰ふ、英吉利が兵隊を募集したと云つては募集費を拂ふ、兵隊は印度に來たからと云つても生産的の仕事をするのでありませぬから鐵道の機關車を買ふたのとは違ふ、さう云ふ風にして過去三十年間に於て英吉利政府に這入つた金が六十億萬圓であります、さう云ふ風に印度から金が出て往くのでありますから印度も貧乏になるのであります、それば政治上からさう云ふ結果が生じて來たので英吉利政府では澤山な給金を役人に遣つて居りますから其代り良い役人も來て居るのであります、印度の領事などは非常な良い領事で是位直段の高い領事はあるまい。又高い金でも拂はなければ印度などに來やしませぬ、其次は何であるかと云ふと印度が貧乏になつたのは土人の間の工業が撲滅されたからであります、今より百年以前はベンガル地方は非常に人口が澤山であつて到る所種々の工業が發達して、絹の織物などは立派な物が出來て日本などにも印度の絹が來て居るさうでありますが支那あたりで出來る物とは違ふ中々立派な絹が出來た、それからモスリンなども印度でなければ出來ない非常な薄い物であつて、それを織るには深い井戸を掘つて井戸の底に人間が居て糸を引いてさうして織つたもの

です、今ではモスリンを織る術が廢れて居るさうです、それは滊車の中で工業學校の校長が居つて其人から聞いたのであります、其外更紗キャリコ——是はキャリコッと云ふ所から出たものであります、斯う云ふ物が盛んに出來ましたから英吉利は印度と競爭をすることが出來ないと云ふので是非印度の工業を撲滅して自分が工業國とならうと云ふ方針を取つて印度の製造品には非常な高い三割から四倍迄の輸入税を取ることにしましたから印度の物品は輸入が出來ないやうになりました、さうして英吉利から這入て來る物は無税にした、さうして土人に物を注文する時は前金を渡して是で何々を拵らへろと命ずる、土人は斯樣な少ない金では迚もお好みの物は出來ませぬと云ふと金を取つて置いて出來ないことはあるものかと云つて金を無理に權に縛付けて鞭で敲いて追歸した、是では迚も製造などをして居つては生命が危ないと云ふので皆な工業を廢めて百姓になつて了つた、是が印度の貧乏になつた大なる原因であります、併し今日新たに工業が起つた、それは何かと云ふと石炭であります、近頃日本の一年の石炭産出高は六百七十萬噸に過ぎないのでありますが印度では七百噸出ますから年々歳々日本の石炭は驅逐されるに違ひない、それから紡績業も盛んになつて來た、それから茶業は中々盛んで日本では茶の輸出高は八百十萬圓位しかない、印度では五千四百萬圓から出來ます、日本は茶の産國だと云つて宇治などゝ誇つて居るが此二十年來日本の茶の輸出は殖えて居ない、印度では二十年間に於て一億萬圓に近ひ輸出高でありますす、錫蘭でも茶が出るやうになつた、私は大分彼方此方往つて見ましたが中々盛んで其爲に態々鐵道を架けて居る所があり電燈で夜茶の製造をして居る所がある箱に詰める迄器械でやつて居る、斯う云ふやうに産業が發達して來たが其の資本は皆な英人の資本であります、近頃綠茶を亞米利加に輸出して居りますが日本と競爭する爲に日本の茶に税を課して居る、それが錫蘭で五十萬圓許り取つて、それを政府が取るかと云ふと政府は取らないで、印度の茶業者に與れて居る、日本では聖路易の博覽會に茶見世を出すに付て政府から五萬圓の保護を貰ふだけで外に何もないのでありますが、さう云ふ風に政府で保護をして居る、併し是は英人に對して保護するのであつて土人の紡績業に就てはどう云ふ方針を取つて居るかと云ふと百分の三分五厘の税を課して居る、それが百十八萬圓で、それを紡績業

者に與れて居るかと云ふと、それは遣らない關庫の收入になるのであります、それてありますから印度の紡績業者と云ふものは百十八萬圓と云ふものを印度政府から取られて居る、土人は斯う云ふ有樣でありますから印度大會と云ふ是は土人の會合でありますが其會から英吉利政府に向つて此通り人民が貧乏になつてはならないから何卒土人の實業を奬勵する方針を取て貰ひたい、又は關税を廢めて貰ひたい、それから印度人を士官として貰ひたい、商業學校を興して貰ひたい——今ては印度の軍隊は二十万程ありますが印度人は如何に功勞あるも中尉より上になることは出來ない、英吉利の士官は假令少尉てあつても土人の中尉の上に在つて命令をするのであります、故に土人の士官を養成して貰ひたいと云ふのでありますす、それから英吉利人があれば高い月給を取るが土人にも高い月給を與へて吳れろと云ふことを英吉利政府に願つて居るのであります、詰り英吉利は文明の政治を印度に布いて居るけれども印度の方から見る時は外國の政府と云ふ感念を持たない譯に往かぬ、印度は印度の階級、英吉利は英吉利の階級を維持して居りまして英人が土人などと結婚をしやうものなら、それこそ社會から退出されて了ふのであります、それて印度の役人などは印度を出張地と心得て居つて英吉利の本國を稱してホームと云つて居る、印度て生れた者迄がホーホームと云つて居る、是等は感情の上に於て印度人の心を刺戟することてあらうと思ふ、要するに土人の方ては軍人の間にも文官の間にも土人を用ゐて貰ひたい、さうするとそれの恩給も印度人の手に這入るのてあるから幸福てあるが用ゐて吳れなければ其の幸福が無くなつて了ふのてある、詰り土人の欲する所は英吉利人の欲せざる所て印度人の云ふ通りにすれば英吉利は名有つて實が無いと同じてあるからどう云ふ風に其問題を解釋して往くかと云ふことは是れから先の見物てあります、私は今日迄英吉利が成功した如く何か處置をするのてあらうと思ひますが近頃の總督ミ・ントの遣方は成るべく英人を多く用ゐて土人を或程度以上には餘計用ゐないと云ふ方針てあるかの如くに思はれますが、さう云ふことがあると云ふと直に物論を惹起すので是等は英吉利ても厄介に思つて居るてありませうが兎に角印度に於て英吉利の政治が行渡つて居ると云ふことは事實てあります、先づ今日は是迄に致して置きます、併せて二時間程御淸聽下すつたことを感謝致します。（了）

舍監の四ヶ月（補遺）

有美

○少しページの都合て、前號にお話しを儉約しましたから、委細申上げると……僕の行ツた中學には是まで隨分亂暴な舍監が居ましてネ……舍監室に竹刀を二本も備へつけて、何か屁理屈を並べて抗論する生徒があると、直ぐ一も二もなく尻を擲ッたものだそうて、其爲め生徒の舍監を視ること、恰も蛇蝎の如く、夏期や冬期の休業などて、自宅に歸ッたものが、又學校に戾ッて來て、寄宿舍の影を見ると……アーまた此の中に這入らねばならぬかと、ゾッと身慄ひがしたものだそうです。

○それて、天長節や紀元節の時などになると、……ヤーお祝の胴上げだといふので、切りに其舍監先生たちを胴上げにして困らせ……マー……昔日の鬱憤を晴らすといふ譯なんてした。また、それを知ッてるから舍監連の胴上げを忌むこと意想の外で、睨めたり叱ッたり、有らゆる法を講じて之を逃げるのてサア。

○丁度、僕の前に舍監をしてた農學士先生は、若い仲々壯快

な男で舎生の間に人望もありましたが、この胴あげには餘程閉口したらしく、爲に雪隱の中に雲隱れましましたくらい・・・・・・。

○これは紀元節のことでしたが・・・・朝の拜賀式が濟んだ頃から、ドウも形勢が穩で無い、胴上げが始まりそうである。部下の舎監連はモウ蒼くなると申すと少し失禮な言だが、餘程警戒を加へて居る。式が濟んで敎員室に這入ッたまゝ、容易に出て來ぬといふ仕末・・・・僕だけは勇を皷して敎員室を出たが、果せる哉六七人ドヤ〳〵と生徒が隨ひて來た。袖を押ふる奴があッても片ッ端から、肱鐵砲を食はせて寄宿舍に歸ッて見ると、又寄宿舍の入口に四五人控へてゝ僕を擁し、胴上げにしやうとする。これも振り離してマア〳〵無事に舎監室にとこそは着きにけれとなッたが

○部下の舎監二人は其日一杯影も形も見せぬ。これは、言はずと知れたことで、ツマリは胴上げが畏いからでサア。そのうちに晩となる。舎監室には僕一人が唯悄然として新聞を讀んでるのみなんですが、舎内は中々非常の騷ぎで、亂暴好きな連中は、隊を組んで各室を廻り、室長を胴あげにして其の賑さ舎中を振動させる程なんです。

○ソロ〳〵お鉢が廻ッて來るワイと思ふてるうちに、果して來た。舎監室の前は一大隊の生徒で黒山を築くといふ仕末・・・・サア愈々かナ・・・・仲々梃杆でも動かんぞとは、僕の腹の中の思惑。なんだ馬鹿野郎奴・・・・そんなに胴上げが恐ろしいか・・・・意氣地無し奴・・・・仲々面白いでは無いか――と僕を笑ふ人もあらうが・・・・其處がそれ辱くも舎監長代理の職を蒙りてるからネ・・・・オイそれと面白ろ半分に奴等のまゝに僕の身躰を任せては、この胴上げに遇ふのを畏がッて、グウの音も出さぬほどに逃げ廻ッてる部下の舎監たちの顏がたゝなくなりますサア。そこは男だ・・・・僕も二人のものゝ顏を立てゝやらんといかぬからネ。

○舎監室に押しかけて來た連中の勢は、また素晴しいもので、・・・・しかし例によりて室の中には一人も立ち入りませんが、押し合ひヒシ合ひ閧聲を作ッてワイ〳〵とドヨめくさま、實に物悽い次第。僕は殊更ら氣取ッて靜に新聞を讀みつゞけ、かゝる騷ぎも餘所吹く風と知らぬフリをして居ると、生徒の或る奴はガラリと戶を開けて『ヤー靑柳先生・・・・エライぞ・・

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

…ヘン…悠然として…新聞讀んでる」なんて、冷評すことなぞもやる。なんと言はれても、僕は甚だ氣取ッて悠然たるものだ。

○そのうちに、一人勇を鼓して群集の中から舍監室のうちに飛び込んで來て「先生…お祝ですからドウぞ胴上げをさして下さへ」といふ。僕は依然頑として身を任せ無い。そこで、兎ても口では僕を動かせんと觀たものか、僕の手首を採りて愈々胴上げの實行をしやうとしたのです。

○「ドンなにしても、僕は駄目だよ。僕は面白いから、させてもよいがネ…そうしては他て迷惑をするからネ、僕はドウしても…やらせぬ。モウ大抵にしてお止めよ」といふても、仲々初めのうちは諦める模樣も見えませんでしたが、到頭根まけをして引上げてしまいましたサ。

○まア…これ位にして、手前味噌も切上げて罷きませう。隨分、ながく〱自惚ばなしばかり致しまして、お耳にタコをよらせ…誠に相濟みません。サヨナラ〱。

劍を以て劍、血を以て血、嗚呼嗚

新文

丘博士の『進化論講話』を讀む

副島生

日本現時の思想界の如く、しかく混沌亂雜なるはなし。ニーツエ、ハルトマン、ヘルベルト等の所說、しば〱學士家の間に稱道せられて、しかも其勢力を永久に續くる能はず、期年ならざるに早く世の忘るゝところとなる。蓋し、嚴肅眞摯の意を以て天地の眞義を究むるの心薄ければなり。されど、進化論の如きは、廿世紀學術の研究に缺くべからざる根本學說なるを以て、苟も學に志あるものゝ、皆な豫備思想として腦中に豫め修め蓄へざるべからざるものなり。然るに、世間未だ此心掛けあらざる爲めに謬說を公にして恥ぢざる者、天下滔々として是なり。然りと雖ども、學者は唯ひとり靜に研學するに止まりて之が誤謬を指摘せざる時に當り、丘博士玆に『進化論講話』を公刊す。まことに其時を得たりといふべし。

予用務多忙の間に於て之を繙き、二日にして通讀し終る。余

純言文一致體を以てして、しかも讀む者を厭かしむるとなし、著者の詩趣を帶びたる流暢優麗の筆致に依るに非ざれば豈に此くの如くなるを得んや。製本は菊版クロース背皮金文字入四號活字八百十四頁にして印刷美麗定價貳圓五拾錢の美本たり。されど、著者の意もし進化說の普及にあらば、コンデンスして一圓以內の製本となせしを可なりとす。然らざれば、定價を此儘にして五號活字の印刷とし、更に專門の細說に涉る又大佳ならずや。世間必ずしも悉く之を解せざるもの、みにも非ざるべければなり、また繪畫の挿入其數乏しきは、誠に恨みとするところなり。

著者は先づ第一章緒論に於て進化論の大體を概說し、第二章にダルウイン以前の進化論史を述べダルウインに至る。第三章より第八章まで、各種の方面より進化論の正確なるを證明すること縱橫無盡、讀む者その誤なきを信ぜざらんとするも又得べからず。第九章よりは更に進んで輓近の生物學及解剖學等の研究より得たる事實により、細を極め微を盡して詳論し、篇末結論のほとりに至り、著者が進化論より得たる人生觀と宇宙觀とを告白し、その論定の大膽にして筆鋒の銳利なる、天下敵なきの慨あり。殊に、進化論が宗教と哲學との迫害攻擊を受くること、實に甚しきものあるを憤り、切りに進化論の爲に萬丈の氣焰を吐く、その勢や當るべからずと雖ども、此くの如きは現時の日本思想界に向て寧ろ婆心たるに過ぎざらんか。されど、これ著者が所說に忠なるの致すところ必しも咎むべきにあらざるなり。

著者は又進化論に餘りに重きを置き、其極宇宙に於ける神智靈動を絕對に否定せるも、これ一局に偏せる論議にして、著者が極力反對するところの社會主義の如きも亦、未だ斯の主義の眞髓を會釋せざるの過ちに出づ。此の如き其正鵠を失せる論議は著者の爲に深く惜むところにして、予の重ねて他日教を乞はんとする點なり　借問す、宇宙は物質と靈動との調和に依るものならずや。それ政治經濟の問題の如き、時と共に變移するものにして一時性なれども、自然と生物とに關する研究の如きは、これ萬有の根本問題にして永久に際ることなきものなり。されば、かゝる問題の爲に其一生を献することの如き、實に學者として最上の光榮なるのみならず、また世界有衆の感謝して措く能はざるところ也。　著者乞自愛

○弘法大師傳　（小野蕭太著）

教界偉人叢書の

○弘法大師傳　（小野藤太著）

教界偉人叢書の第一編として發刊せるものにして阿闍梨沙門空海上人の一代誌なり其の叙に曰く『偉人の傳や世に多し然れども其の多くは荒唐無稽に亘り且つ組織なく徒らに叙事の繁簡にして偉人の眞面目果して那邊にあるや大師も知るに苦み却て人心に惑化を與ふるに足らず』と以て本書の内容を窺ふに足る、出ては奈良佛教の腐敗を革新し入りては軋轢甚しかりし神佛を調和す一度渡唐するや彼地の人をして前途多望なる日の出國を想はしむ大に小に熱血溢れ其の居動言語一として時人の崇拜の念を喚起せしめざるなし又偉人なる哉小野氏大に務め南都佛教の概況より大師か一代事歴を十一章に分ちて詳説す最も著者の注心せられしは今日に傳はる誤謬の訂正にあるらし密藏開立時代、成功時代、如何に奮勵せしか、彼が一生の如何に多事なりしか、大師と最澄の關係等、偉人としての空海を知らんとするもの先づ此の書を讀め（文明堂發行）（定價四十五錢）

○明如上人御傳繪鈔　（佐竹智應著）

本願寺第廿一世明如上人一週忌紀念として出版せるものなり口繪數葉を挿入す記する處十八章先づ上人御誕生當時の我が國の趨勢より始め排佛毀釋、佛教大學の創立、學制改瓦、軍隊の布教、監獄教誨、教家子弟の海外留學に於ける上人の御骨折りの條々細かに說きたるものなり日淸交戰に際しての御盡力殊に征淸陸海軍人に贈られし御親書の如き誰か此を讀んで勇猛奮進せさらんや而も名門に育ちさせ給へて行脚の僧たらる丶風、其の說くや其の敎ゆるや炎ゆるか如き熱情仁慈を以てせらる世の敎誨の任にありなから浮搆輕薄なる僧侶耻死して可なり此の書能く明如上人の性狀を寫したり挿圖の如き層一層感化に力あり敎徒たるものよろしく讀むべきなり只惜むらくは裝幀何にとなく法師しみの感あり（京都顯道書院發行）（代價拾八錢）

○小　　扇　（與謝野晶子作）

作者の短歌は最も解せられざるものとして、世に名あるものなり。されど、又其天才は天下の公認するところなり。その難解なるは、一たび腦中に浮びし詩想の文字となる間に於て、變化を受くること最も多ければなり。『小扇』は『みだれ髪』よりも更に難解なるものなれども、その詩想は其難解なるたけそれたけ複雜なるものなり。（大阪文淵堂出版。定價卅五錢）

○團十郎繪葉書　（大阪文淵堂板）

思ひ切つて垢拔けせるものなれども、ドコやらに大阪臭を帶ぶるところ、千古の遺憾なり。

時　　事

○回向院の角力

本所回向院の角力は天下の大事件なり。世間之れが爲に沸騰し、新聞紙は其紙面の大部を之が爲に割ひて惜ひず、政治外交のこと、反て回向院の勝敗より大事ならずと爲すに似たり。是れ實に奇怪の現象ならずや。然れども、翻りて思へば、必ずしも怪むに足らず。回向院の土俵にのぼる力士は、今の有らゆる政治家と有らゆる學者と事業家とよりも眞面目なるものなり。回向院の角力の天下を動搖する以因實に玆にあり。今の政治家と事業家とにして、其爲すところに忠なること、若し力士の土俵にのぼれる時の如くならば、天下豈に之が爲に動されざることあらんや。世の人の其一擧手一投足に留意すること、素より回向院土俵上の力士が勝敗に於けるに等しかるべし。新聞紙また素よりこれが爲に紙面を割くに吝たらざらん。今日の弊は力士よりも眞面目なる人士なきにあり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○小黨分裂

人もし春秋二季即ち、所謂日本の美術季節の頃に當り、上野公園に杖を引かば、無數の美術展覽會が、互に幟をつらね彩旗を飾りて、觀覽者を迎へつゝあるを觀るべし。その或るものは白馬會と稱し紫瀾會と稱し、又日月會無聲會日本美術協會展覽會太平洋畫會日本繪畫共進會其他殆んど枚擧に暇あらず　而して、其陳列するところを問へば、概ね皆な同一品類に過ぎず。たゞ互に分裂し互に孤立し互に排斥して此くの如くに至れるのみ。また音樂界の事情を觀察するも、同じく分裂し同じく孤立し一人〳〵各々黨を爲して一會を組織し、互に排斥せんとするものゝ如く、演劇界にありても、今や團十郎菊五郎死後漸く相分離確執せんとするものゝ如し。要するに、此くの如きは、是れ實に衆愚を一統するに足るべき大偉人の、今の世に欠乏せるによる。小黨分裂、これ實に天下に偉人なきを彰表するものならずや。この間に於て、稍々統一あるものを新演劇界とす。川上音二郎によりて一統せらるゝに似たり。音二郎は夫れ倭傑乎

○福地源一郎の今昔

福地源一郎の今なほ築地に居寓するを思ふて、近かく之を尋ねたる人あり。附近を彷徨して遂に寓所を見出す能はず、之を派出所の巡査に問ふ　査公廿六七歳の後青年なれども、遂に福地源一郎の名を知らざるものゝ如く、長く考慮す。福地は今や去りて築地にあらず、既に芝に移れるなり　査公暫くにして問を發して曰く「福地源一郎とは……それア何商賣の人です乎」と。尋ねられたるもの、この一言に自失して其儘派出所を辭し歸り、憮然として歎じて曰く、人間の榮枯盛衰何ぞ夫れ此くの如く甚しきや　福地は是れ一時洛陽の紙價を高め、才名を天下に歌はれたる人、今や査公も其名を忘れて「福地源一郎は何商賣の人です乎」と反問するに至りては、誠に人生の最も慘なるものに非ずやと。然り、是れ人生の慘なるものなれども、又まことに人生の常なるものなり　あゝ紅顏褪め易し。日月一度去りては又歸らず。力めざるべけんや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

隨感

○動物學

動物學は、啻に生物學者のみの講究すべきものならず。凡そ人間、自から知り、亦た人を知るに、遂に此學科に精通することなくば、其の心髓を得じ。ダルヰン出でてより、人を獸に近くしたりと言ふものあれど、獸に近くするは實相に近くする也、眞理の妙覺に於て正に一歩を進めたりと云ふべし　只だ聖人纔ぴらかに之を識り、深く修むる所と、濃かに恕する所と、二つ乍ら倂せ有す。

○社會學

社會學の根抵を動物學に說くの說は、前人已てに道破して而も尙ほ徹せざるやの憾みあり。武力、經濟、及び道德の調和を論ずる人の、時あつてか稍や究するとあるは、動物學を念はざるの故にあらずや。人の禽獸を壓するに智力を要すると見ば、戰備正に熟して人間互ひに獸性を熾んにする時に方りては、一片の道義の効なき所以亦明らかならずや。人苟くも人間に交はりて立つ、もし其の社會に於て優勝せんとせば、必らずや人間の獸性に對して壓倒し得るの力量なかる可からず。武力、及び經濟を知らざるもの丶、遂に劣敗する、亦已むとを得ざる也。

○人間學

禽獸、野性多しと雖ども、尤とも深く情けに感ず。彼等餓ゑて其の野性發動し、遂に自から制すると能はざる如き場合にあらずば、其の尤とも微妙に感激する所は、仁愛なり。故に、達人は野に行きて兕虎に遇はず、遇はざるにあらず、遇ふも兕虎の毒嚙に入らざる也。聖者曰く、歯を以て歯に償のひ、目を以て目に報ゆるは、古しえの事也、汝曹、右の頰を打つものあらば倘左を向けよと。高貴大愛、こゝに至りて極まる。人間學んで是に達せば、些さか以て安んずべき也。

○一戰ある所以

人自から聖道を修むるとも、強ひて之を他に要むべからず。

況して、之を以て其の利となし直ちに掲げて其の安んずる所となすを得んや。仁人たとひ左頰を向くべき、國民をして皆な頰を打るゝを忍ばしむべからず。慈然として小虫にもゆかしくする人の、遂に劒を抜いて一戰せざるを得ざる此の故なり。

○眞に兒戲

忽ち激して忽ち擊つ。忽ち勝敗して又忽ち榮辱あり。血と勳章と、功成るの大將軍と、寡婦及孤兒とを見る。軍艦に尊ぶものあり、兵隊に慕ふものあり。擾々として騷動す。觀ずるもの曰く、眞に兒戲の如しと。眞に是れ兒戲のみ。左れど兒戲と云ふ所以のもの決して滑稽を意味せず、蓋し未だ成人とならざる兒童の戲劇の如けん。

○只だ人にあり

一と度び死せずして能く生くるものはあらず。生死の關門に眞實の覺悟を發し、玆に㷔然として新らしき生命に入る。個人然り、邦家亦然り。今の危機は乃はち大勃興の機。衰運、

盛運二つ乍ら待つ、之を決するものは只だ人にあり

○不可不學

人傑の稀ときは國寶よりも稀とし。識見透了せず、目下機宜を誤まらば、億兆の禍福立どころに轉ず。人間、學ばざる可からず、深く自重せよ。

○人生の慘

一夜蹶起して、青山練兵場に到る。人馬、聲すでに絕し、四面更に寂。たゞ電燈の所々青白に輝やくある耳。風寒く、草枯れ、古戰場の感あり。顧みて友と目語す、人生何んぞ慘たる。

○露國の暗黑面

後藤君贈らるゝ所の此の書を讀む。一と度び開いて閉づる能はず、卒讀して感慨切なり。此の暗黑固より陋なりと雖も、其の酷なると、烈なると、則はち稍や快を呼ばしむるものあり。嗚呼、この未開化の蠻勇大國、何んぞ一新して盛文の域

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に進化せざる。

○日本人

日本人の知りがたきや、日本人自己躬からすら知らず、況んや外人に於てをや。平時と非常とに於て彼の如く多く相違するものは稀ならん。一朝感激して英雄及び聖者となり、忽ち亦た惰弱細才の神經家となる。其の懸隔の甚しきや、自から信ぜず、況んや外邦の他人に於てをや。在留幾年の文明國民と雖ども、正しく日本人を觀察したるものは尠かるべし。

○家康

敵國外患なきの憂ひ、我國に於ける如く切なるは少なし。たとひ桃源の夢破れて、華胥の樂みは消ゆるとも、人をして眞面目ならしむるものは只だ是のみ。家康曰く、用心堅固、油斷大敵、大膽不敵と。極めて能く短所長所を敎示せり。

○秀吉

用心堅固ならざるに非ず、油斷あるにあらず、就中尤とも大膽不敵、而して一種、家康に無き或るものを存するは猿面郎なり。修養を經て天才に達し、成敗に熟して大觀に入る。豪快よく自修の跡を沒する豐公の如くにして則はち日本人の趣味に適するもの歟。但だ惜むらくは國民、小太閤に多くしく、大家康に少なく、其の修むるの足らざるのみならず、修めて而して脫するもの、殆んど稀なるとを。

○日本人の趣味理想

秀吉にして家康を合し、南洲にして海舟を合し、玆に日本人の趣味理想初めて適す。

○名刀猶ほ偉人の如し

偶として名刀を得たり。熊澤蕃山の曰く、刀は猶ほ人の如し、刀を觀る亦た人の如し、洪湊の影、沈靑の色、其の底を窺ふと能はざるに至りて初めて偉大なるを知ると。吾が此の刀乃はち是歟。晝間俗務了つて神氣やゝ勞する時、もしくは夜半人寢て精心澄徹の際、室を拂つて莞爾として接見す。名刀は、猶ほ偉人の如し。

リユウマチズム靈藥

リウマチズム靈藥効驗錄

●前山口縣知事武田千代三郎氏の來書に曰く……御調劑のリウマチス特効藥早速御送り下され難有存候。早々家内に服用致させ候處、僅か二粒にて効驗相現はれ、熱も去り痛疼も消へ失せ、積年の持病一朝にして全く平癒いたし、餘り不思議にて、うそかと思はれ候位に御座候。かゝる靈藥あることを知らず、到底全治の見込なきものと諦らめ居候處、今度び偶然の事より御近づきに相成り、御陰にて多年の宿痾を絶つを得たるは、實に何より天幸に御座候。劑妻が此病を獲候は、先年神戸在住中にて、急性リウマチスとか申して、忽然發病、約一ヶ月程大苦しみ致し、幸に醫療の効にて一時は平癒いたし候樣に見へ候處、其後慢性と相成候と見へ、年々梅雨中は申すに及ばず、其他の季節にても雨天の兩三日も續き候へば、忽まち發病するを常といたし居候處、此度御陰樣にて根治し得たるならんと大に悦び居候。一日おきとの御指示も有之候得共、初服より中二日を隔て第二劑を服用いたさせ候。然るに其頃より効驗相現はれ、終に第三劑を用うるに及ばずして全治致候。承り及候へば、他にも御投劑にて治癒致候方々多勢有之候由誠に不思議の靈藥と申すべく、かゝる靈藥を御手許に秘し置るゝは惜むべき事に御座候へば、廣く之を世に公にせられ、該病に苦しめる人々を救はれ候ては如何かと御勸め申上候。先は御禮迄如斯御座候。敬具（卅六年八月五日）

●大日本女子大學校教授戸川殘花氏女道子君の來書に曰く……明治卅六年一月中旬より服用いたし、九粒にて全快いたし候。リウマチズムは兩三年前より手首に痛を發し困難いたし候もの故、靈藥を用いて大きに快よく相成り休藥せし處、又々再發致し再度服藥都合九粒丈け相用候處、神の如く快癒いたし候（卅六年九月七日）

●經濟雜誌主筆布川孫市氏より來書に云く……小生が妹貞子數年來リウマチズムを患ひ種々醫藥を試ろみ候へども、更に其効果無之、近來は殊に重症に陷り、室内の步行すら困難を感じ候に付、人の勸めに從ひ、さる溫泉に入浴せん爲め參り候處、途中病勢つのり止むなく歸宅仕候。右の事情圖らず御話申上候處、貴兄には秘藏の良藥有之候趣にて、一劑頂戴早速試用せしめ候處數日にして全快、爾來再發不仕、今日尚ほ健在に候。御秘藏の良藥服用候ものは、悉皆全快せられ候趣は、かねて承り候得共、今度愚妹に服藥せしめ、其効驗の著るしき今更の樣に感服仕候。右御禮かた〴〵敬具（卅六年七月十日）

●其他同樣の感謝狀數十數通あれども略す。

東京市神田區三崎町三丁目一番地（東京座角）　王子病院出張所　（電話番町一〇〇二）

リウマチズム靈藥の記

余の少時米國に留學して恩師レーレー先生の許に寄寓するや、先生の余を見る恰かも家人の如く、萬里異邦の孤客をして温然慈父の膝下に在るが如くならしめき。後ち別を惜んで一旦歸朝し、去々年復た西航し、吾恩師の家を訪へば、恩師夙に去つて隔世の人と爲る。余痛恨に堪へず、追慕低徊して數夜故人の室に眠り、端なくリウマチズムを病む。先生の遺子にして當年の余が同窓者親しく看護して家秘傳の靈藥を惠まる。頓服、數日にして病怱然として癒ゆ。余驚愕し其秘方を問へば、先生の遺子泣いて曰く、之れ皆に先人徒に遺すの紀念ならんと。悉とく此秘劑を傳授せらる。余歸朝の後、先づ故舊親戚に試むるに、皆な神効あり即ち漸次に他の傳聞するものに分與するに、百服百中、偶に靈助あるに似たり。此に於て舊友王子病院主石川光孝氏に乞ふて、配劑を托し、廣く一般世人の需に應ずることゝはなしぬ。若し之によつて救世濟衆の小功あらば、皆是れ恩師の賜なりと云ふべし。

明治癸卯の冬

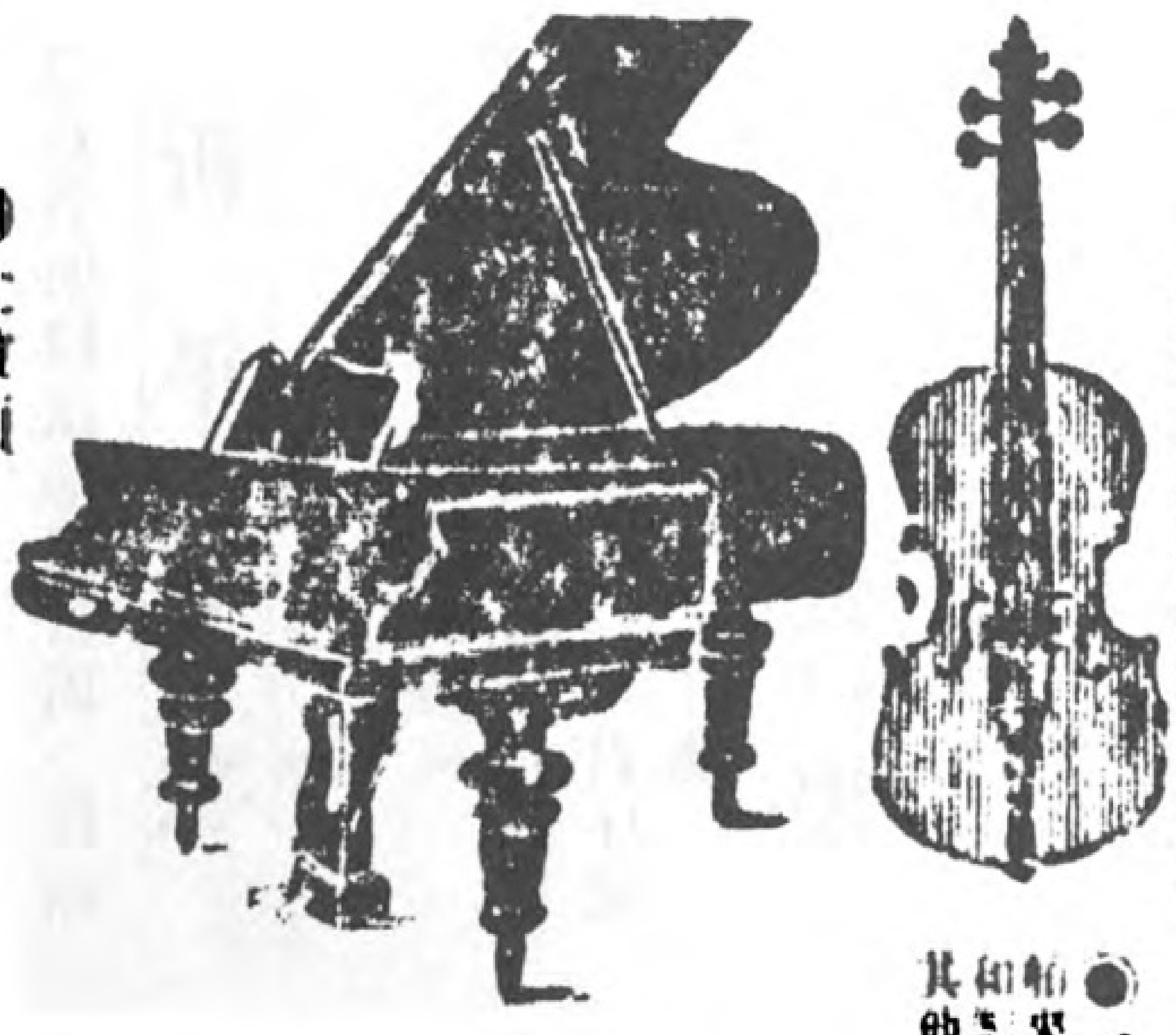
東京巣鴨村
明治女學校内
川井運吉謹識
（[illegible]町一〇〇一番）

樂友社樂器販賣部

◎◎◎◎開店披露並びに營業目錄◎◎◎◎

●樂友社製造改良ヲルガン

第一號形	金十七円	每月賦	八十錢
第二號形	金廿七円	仝	八十錢
第三號形	金三十七円	仝	一円五十錢
第四號形	金四十三円	仝	一円五十錢
第五號形	金四十八円	仝	一円五十錢
第六號形	金五十六円	仝	一円五十錢
第七號形	金六十七円	仝	[illegible]円
第八號形	金[illegible]十[illegible]円	仝	[illegible]円
第九號形	金[illegible]円	仝	[illegible]円
第十號形	金百円	仝	[illegible]円
第十一號形	金[illegible]十[illegible]円	仝	[illegible]円
第十二號形	金[illegible]五十円	仝	[illegible]円
第十三號形	金百八十[illegible]円	[illegible]	五円
第十四號形	金二百円	[illegible]	五円



●ヴァイオリン
舶來品金二十円以上九十圓迄
和製九圓以下二十円迄
其他一切附屬品あり

●ピアノ
舶來五百圓以上[illegible]
和製百八十圓以上[illegible]
[illegible]學校用ピアノ[illegible]

●喇叭
[illegible]

●太鼓類
○大太鼓
○陸軍用太鼓
○小太鼓
[illegible]

●絃樂類

○ピアノ　○ダブルバス　○ギター　○セロ　○マンドリン　○バンジョー

○其他一切如何なるものにても御注文次第新調製造可仕候

販賣所　東京市神田區三崎町三丁目二番地　樂友社樂器販賣部

御報知次第樂器目錄進呈す●

樂友社出版目錄

主筆　巖本捷治

副主筆　堤正夫

毎月一回二日發刊　音樂之友　定價一冊金十五錢　半年分金八十五錢　一年分金一圓六十錢　郵税不要

●我邦音樂界唯一の機關雜誌にして社員は悉く東京音樂學校教師にして八名なり

下田歌子序文　津田梅子序文　樂友社同人著

六版　名媛唱歌　精珍洋装製美本　定價金廿錢　郵税不要

東京音樂學校講師高折周一作曲　音樂之友記者野村兎兒作歌

改版　國民唱歌　海國男兒　一冊金三錢　五十部以上　百部以上二錢　發行所

東京音樂學校講師前田久八作曲　東京音樂學校講師高折周一作曲

再版　新年唱歌　一冊金三錢　五十部以上　發行所

○小學校唱歌教科書

東京音樂學校長大島義脩君序文　東京樂友社々長巖本捷治君序文　東京音樂學校教師五名作曲

新刊　小學唱歌教材集　定價未定

來ル三月上旬發賣

○樂友社一覽○

社長　巖本捷治

音樂之友副主筆　音樂書家　堤正夫

音樂之友編輯主任　今村九鐵

編輯局社員　東京音樂學校講師　前田久八

仝　高折周一

仝　齋藤左右

仝　石原重雄

發行所　東京市下谷區仲徒士町三丁目七十二番地　樂友社

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

苺と花

三瀨眞若著　飯田雄太郎畫

三色版寫眞版七葉入

本書は、著者が家庭園藝の普及を望むの餘、その經驗を記したものです。どうぞ御一讀を願ひます。

四六版美本紙數百頁

正價金四十錢　郵稅四錢

札幌　興農園發行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

獅子印齒磨

吉野獅子

進んでいづる獅子の勢ひ勇ましうおもしろや千代も八千代もかはらぬ宿のちぎりにぞ園生におふる竹の子のこのこの子まで生ひそひて榮えゆくこそ目出たけれ、

……藤永勾當調

ライオン齒磨●●●●●

ライオン齒磨●●●●●

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY